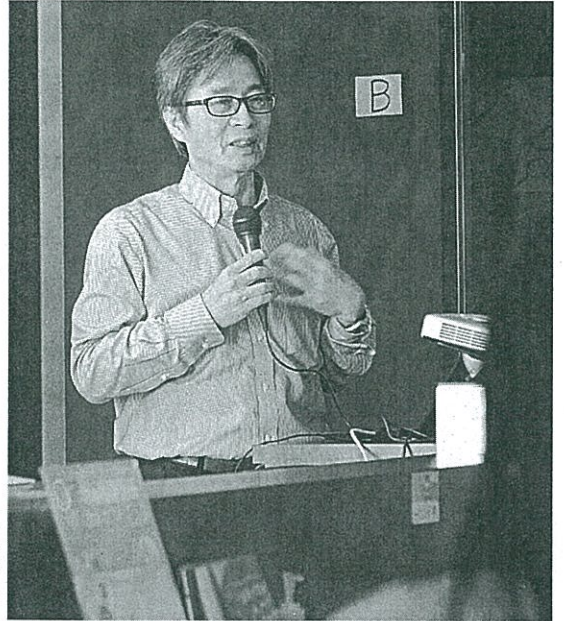


患者や家族 思い共有 「がん哲学」に注目



自身のがん治療の体験談を交えながら、「がんは人生を仕切り直すきっかけをくれた」と話す岩手医大付属病院副院長で、盛岡メディカルカフェ顧問の杉山徹さん＝盛岡市盛岡駅前北通1のスウェンソン盛岡スタジオで

盛岡でメディカルカフェ

「がん哲学」が県内でも注目されている。

「がんのこと、子どもにどう伝えた?」「私と同じがんで、発症から20年たっても元気な人と話せてちょっと勇気が湧いた」。がん患者やその家族、医師らがお茶を飲みながら悩みなどを語り合う企画では、治療の不安やがんをきっかけに見つめた直した生きる意味など、率直な思いが打ち

明けられた。

盛岡市盛岡駅前北通

1の医療用ウィック(かつら)を販売する「スウェンソン盛岡スタジオ」。14日に開かれた「がん哲学外来メディカルカフェin盛岡」には、甲状腺や前立腺がんなどの患者とその家族ら30〜70代の男女15人と、同社のスタッフが参加した。前半のミニレクチャーでは、岩手医大付属

病院副院長で、「カフェ」の顧問を務める

杉山徹さんが、2010年に自分の左肺に見つかった肺がんの闘病体験を紹介。「家族の何気ない真心に触れた瞬間や、健康管理への意識の芽生え、生きるということを考える時間を持てたことは、つらい治療の中で得られたもの」「がんと向き合うというのは、人生を仕切り直す機会」などと話した。

れてテーブルを囲み、お茶を飲みながら治療の葛藤や家族の悩みなどを約1時間にわたって語り合った。「病氣の話を本人にあれこれ聞くと嫌かなと思ってそっとしているが、とても心配」。父親が闘病中だという同社の女性スタッフの体験に、一関市から参加した乳がん患者の女性(70)は「うちの娘も何も聞いてこない。娘は一人で苦しんでいるのではないか」と不安に思うことがある」と応じた。

女性が続けて「病氣は触れていけない話題と考えず、時々は病氣のことをお父さんに聞いてあげてほしい」と言う。他の参加者も「うん、うん」とうなずいた。

治療と仕事の両立の悩みもテーマになった。北上市の女性(62)は「職場や近所で誰がどの程度、自分の病氣を知っているかわからず不安になった。勇気を出して公表したら、意外と周りにサポートしてもらえて気が楽になった」と振り返った。

参加者は時々涙を見せたり笑顔になったりしたが、終始和やかで話しやすい雰囲気だった。県立中央病院がん化学療法科長で、カフェ顧問の加藤誠之さんは「寝ても覚めても治療のことばかりを考えていると、毎日不安で日常が成り立たない」と指摘。「治療以外に

医師が同じ目線で

全国で活動広がる

がん哲学外来は、順天堂大の樋野興夫教授(病理・腫瘍学)が2008年に始めた。がんの手術や抗がん剤などの治療で生活が大きく変わり、仕事や周囲の人との関わりに不安を感じた時、カウンセリングやセカンドオピニオンではなく、医師が患者と同じ目線に立って悩みを聞き、病氣と落ち着く」などと話した。

【近藤綾加】